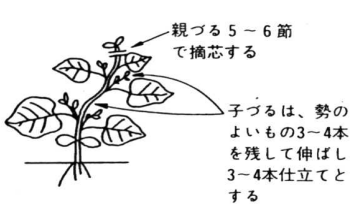
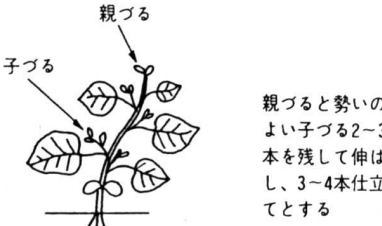
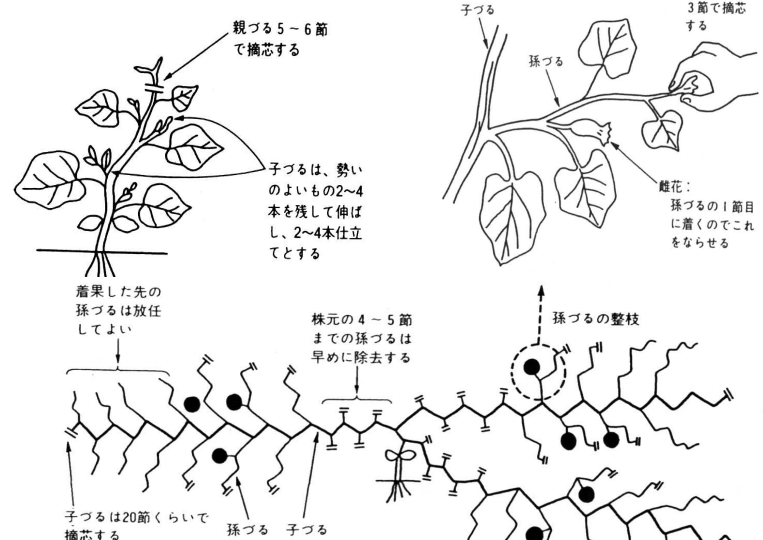
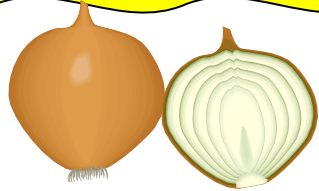


野菜の作業

梅雨の時期です。早めの敷ワラや予防防除の実施で病害の発生を未然に防ぎましょう！

種まき	定植 (植付け)	栽培のポイント									
<ul style="list-style-type: none"> ・ホウレンソウ ・コマツナ ・チンゲンサイ ・ダイコン ・カブ ・スイートコーン ・ニンジン ・シロウリ など 	<ul style="list-style-type: none"> ・サツマイモ ・オクラ ・ゴーヤ など <p style="text-align: center;">収 穫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タマネギ ・ニンニク ・シュンギク ・キュウリ ・ニラ ・サヤエンドウ ・ラッキョウ など 	<p>【スイカの仕立て】</p> <p>A: 子づる仕立て</p>  <p>B: 子・親づる仕立て</p>  <p>雌花は各つるとも最初は7~8節、その後は6節おきくらいに着く。1番果は品質がわるいので2番果~4番果に着果させるよう、1番花は摘み取り、2~4番花が咲いたら早朝人工授粉をおこなう。(受粉日を記録したラベルをつけ収穫の目安とする)。卵大になったところで摘果し、1つる1果とする。収穫は大玉で受粉後50日位。小玉は45日位。捲きヒゲの1/3位が枯れた時。</p>									
<p>【アスパラの立茎と管理】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立茎時期及び方法 定植4年目で6月中旬5年目以降で6月下旬頃だが、品質や収量低下が目立ってきたら収穫をやめて立茎を行う。ネットやマイカー線などで倒伏防止対策を講じ、直径10ミリ前後の茎を一株当たり5~8本程度たてる。 ・施肥(収穫打ち切り7日前頃) 元肥(10a当り) <table border="1" data-bbox="71 1792 454 1982"> <thead> <tr> <th>肥料名</th> <th>施用量</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アスパラすくすく</td> <td>140kg</td> </tr> <tr> <td>サンライムプラス</td> <td>100kg</td> </tr> <tr> <td>発酵鶏糞</td> <td>250kg</td> </tr> <tr> <td>堆肥</td> <td>5t</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・病虫害防除 下枝は整理し風通しをよくする。防除歴に従い梅雨期には7~10日毎に防除を徹底して行う。 	肥料名	施用量	アスパラすくすく	140kg	サンライムプラス	100kg	発酵鶏糞	250kg	堆肥	5t	<p>【メロンの仕立て】</p>  <p>果実は、1つる2~3果(アンデス2果、プリンス3果)を目標にする。7~12節のところのやや縦長の果実を残し、他は早めに摘果する。収穫の目安はアンデスで開花後50~55日、プリンスで開花後35日~40日。</p>
肥料名	施用量										
アスパラすくすく	140kg										
サンライムプラス	100kg										
発酵鶏糞	250kg										
堆肥	5t										

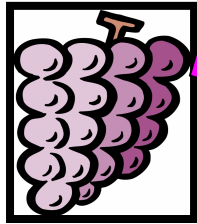
タマネギひとくちメモ



【人間には有益でも動物には有害！】
 原産地は中央アジア。地中海沿岸ともいわれます。古代エジプトで栽培され、ギリシャでは紀元前10世紀、ローマでは紀元前5世紀には栽培されていました。ただしヨーロッパ帯に広まったのは16世紀から。日本には明治以降伝えられました。たまねぎの辛みは硫化アリルという硫黄を含む成分で、涙が出るのはたまねぎを切ると空気にふれ、この硫化アリルの仲間の催涙性物質が発生するからです。硫化アリルはビタミンB1の吸収をよくしたり、血液をサラサラにする効果もあります。米食中心でビタミンB1の不足しがちが日本人には欠かせない野菜といえます。しかし、動物が食べると中毒症状をおこすことがあるので可愛いペットには厳禁！！です。

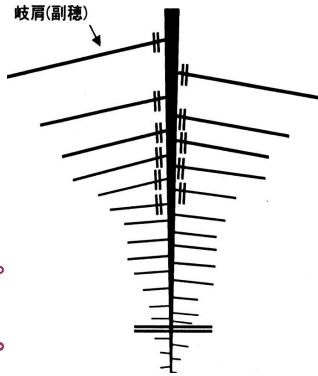
果樹の作業

【ぶどうの房切りと房落し】

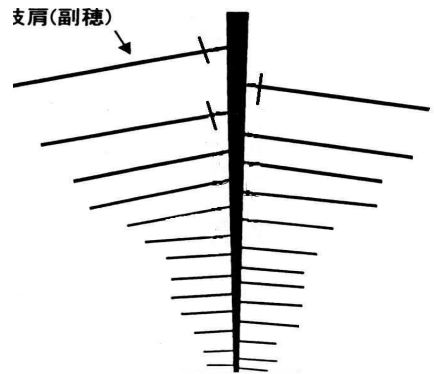


巨峰は穂先端をにつまみ15～17段を残し他の部分は落とす。ナイヤガラ、スチューベンは肩と上部1～2段を落とし形をつくる。着果量は巨峰で坪当たり12から13他は20房程度とする。

巨峰（有核）



ナイヤガラ・スチューベン



農業豆知識

質問コーナー

野菜に発生する害虫の生態や発生の時期について教えてください。

害虫名	生態と発生時期
アブラムシ類	農作物に大きな被害を及ぼすものは30種。体長は2～4mm程度の種類が多く、色は濃緑、淡緑、赤、黒、茶、黄色など様々。春から秋までは雌だけで繁殖（単為生殖）して世代を繰り返す。繁殖力が旺盛で、成虫は条件が良いと毎日数匹から十数匹の雌の子供を産み（卵胎生）、子供は10日前後で親になって雌だけで（単為生殖）子供を産み続ける。春と秋に目立ち、暑さに弱いため夏には一旦発生が少なくなる。初夏頃に翅のあるアブラムシが生まれて移動する。秋になると戻ってきて繁殖を繰り返すが、雄が生まれて交尾をして卵の状態越冬する。アブラムシの甘い排泄物はアリの好物で、アリとアブラムシは共生関係にある。逆に天敵にはテントウムシ、クサカゲロウ、ヒラタアブ、アブラムシに寄生するハチなど多くの種類がいる。（テントウムシの成虫は数千匹のアブラムシを食べるといわれている）
コナガ	アブラナ科植物の害虫。卵→1齢幼虫→2齢幼虫→3齢幼虫→4齢幼虫→蛹→成虫（蛾）というような生活サイクルを繰り返す。1サイクルは温度で違うが、23℃では20日。休眠しないので暖冬には成虫が発生することもある。4月頃から5～6世代が発生するが、5、6月と9月に多発生する。1齢幼虫は葉の内部を食べ、2～4齢幼虫は葉裏にいる。1生涯のうちにコナガ1匹が食べる量は約1cm ² 、その8～9割を4齢幼虫の間に食べる。卵、老齢幼虫には薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の間に行うことがポイント。（成虫が増えてきた後7日位）周辺のアブラナ科雑草を刈取ることも必要。天敵はクモ、アシナガバチ、アリ、ハナカメムシ、スズメ、カエルなど。
ダニ類	野菜に寄生するハダニ類は約10種。中でもナミハダニとカンザワハダニが重要。成虫で体長が0.5mm程度と小さく、主に葉裏に寄生している。卵→幼虫→成虫と不完全変態し、高温乾燥を好むため、ハウス内や梅雨明けから9月頃にかけて繁殖が旺盛になる。逆に水に弱いので、夕立などがあると生息密度が下がる。卵や成虫の状態越冬する。雌と雄がいるが、雌は交尾しなくても産卵することができ、この場合はすべて雄が生まれ、交尾するとすべて雌が生まれる。そのため、雌が一匹いればどんどん増えていく。クモの仲間なのでクモと同様に糸を出し、一つの場所での寄生数が多くなり過ぎると、出した糸を風にのせて移動する。天敵は、捕食性のカブリダニで生物農薬として製品化されている。

あさつゆ連絡先 電話:FAX 41-1062

技術事項作成協力：上小農業改良普及センター
 櫻井主任企画員 (Tel.25-7157)